

世田谷線沿線えんどう豆型まちづくり

特定非営利活動法人まちはらぼ

理事長 柴田 真希

1. NPO 法人まちはらぼについて

NPO 法人まちはらぼは、地域の様々な活動の「事務局機能」「情報発信機能」として、地域活動の中間支援をしていくために発足した。いろいろな方々が地域で活動をしよと
思い立った時に、私どもが中間に立ってコーディネートをしていくこと、地域の情報を発信
するというを目的として立ち上げたものである。

まちはらぼの事業内容については、まず「地域活性化のための普及促進事業」があげられ
る。これは地域活性化のためのイベントの開催などが主な事業である。次に「地域活性化
のための情報収集及び情報提供事業」があげられる。まちはらぼでは、情報紙の発行を行
なったり、ポスター、ちらしの制作、ホームページの管理運営などもしており、この2つ
が大きな柱となっている。

まちはらぼは会員が10人、理事3人、監事1人で運営している。できる限りコンパクト
な法人として立ち上げた。NPO 法人では、事業や運営方針を理事会や総会で決定する
が、実際に仕事をしていく場合には、意思決定機能を理事3人による理事会に集約し、能
動的、機能的に取り組むことを心がけてスピードを重視した活動を目指している。

2. まちはらぼの取り組み経緯

～地域活性化のための情報収集及び情報提供事業～

まちはらぼは、2002年から任意団体として活動を行なってきた。2000年頃に世田谷区
男女共同参画センター「らぶらす」で、区民スタッフとして3年間、情報紙「らぶらす」
の制作に携わった。世田谷区内の女性が集まり、情報紙の編集や講演会を企画する活動
を行なっていたが、そのメンバーには、新聞のコラムを書いていた方や、ミニコミ誌の編集・
取材をしていた方などが集まっていたので、「ボランティアの期間が終わってからもこのメ
ンバーで何か活動していこう」ということになり、地域情報紙「アンの Setagaya」を発行
することになった。これは「世田谷の女性のための情報紙」というコンセプトで編集・発
行したものである。

発行した当時「都立母子保健院」が廃止になるときで、我々自身がちょうど子育て世代
であったため、「なぜ廃止になるのか」という強い疑問を持ち、母子保健院や小児科医の先
生にその経緯について取材を行なったりもした。「世田谷の女性のため」という切り口を維
持しながら、自分たちで広告を取って、1年以上発行を続けた。

東急世田谷線沿線情報紙の「駅ごと瓦版」や「せたがやラブ」の編集、三軒茶屋銀座商

店街のホームページの制作・管理、「子ども・子育て総合センター」の子育て情報紙・パンフレットの制作や、世田谷区広報「情報ガイド」の編集なども行なった。このような取り組みを続けていたことで、地域で活動を行っている方々などから「まちづくりの手伝いをしてくれないか」というお話をいただき、活動が広がっていった。

3. まちこらぼの取り組み

～地域活性化のための普及促進事業～

まちこらぼの取り組みのもう一つの柱として、地域活性化のための普及促進事業があげられる。現在では、こちらがメインとなっており、地域の方々との話し合いの場を設けながら、イベントの開催などとともにまちづくりを進めていく取り組みを行なっている。以下、具体例を紹介していく。

3.1 玉電 100 周年記念イベント

世田谷線の前身である「玉電」が、渋谷から三軒茶屋に乗り入れて 100 年になったということで、「玉電 100 周年記念イベント」が 2006～2007 年にかけて行なわれた。このイベントのために、地元の方たちや東急電鉄をはじめとした企業が加わって実行委員会を立ち上げた。会長は昭和女子大学の坂東眞理子学長にお願いし、様々な場面でご協力をいただいた。「現代版花電車復活祭」や模型展、写真展、シンポジウムも開催した。パネリストをお願いしたタレントの泉麻人氏にテレビで PR していただいたこともあり、会場は大入り満員、世田谷線沿線は大混雑となった。これら一連の玉電 100 周年イベントは、世田谷線沿線の地域活動にとっての求心力となり、活性化の起爆剤になったと言えよう。



2007 年の玉電シンポジウムは大入り満員



実はこのイベントの前、2003 年頃に、東急電鉄と世田谷線沿線の地元の人たちが集まり「世田谷線とせたがやを良くする会」という団体が発足した（現在、まちこらぼが事務局を担当）。当初は東急電鉄に対して「駅のここを直してほしい」「なぜ〇〇しないのか」と

というような話が多く出て、なかなか会議が進まなかったのだが、この玉電 100 周年イベントをきっかけに、協力的、建設的な意見が多く出るようになった。これは「世田谷線」が「愛すべき地元の資産」として、改めて認識されたのではないかと考えられる。

3.2 駅と商店街のコラボレート・クリーン大作戦

商店街では「駅と商店街のコラボレート・クリーン大作戦」を 2002 年からはじめている。当初 3 つの商店街の清掃から始まったこのイベントも、今では 11 の駅前商店街に広がり、毎回 300 人前後の参加者があり、定着している。参加者には「世田谷線沿線ポイント」という地域通貨をお礼として発行している。これは 1 枚 250 円で、商店街で割引券として使用したり、東急電鉄のせたまる IC 乗車券にチャージできたりするものである。紙の地域通貨を改札窓口で提示すると IC カードにチャージできるという仕組みは、東急電鉄が国土交通省に申請し、許可を得て行なっており、当時としては画期的な取り組みだった。



駅と商店街のコラボレート・クリーン大作戦

3.3 世田谷線つまみぐいウォーキング

2007 年から「世田谷線つまみぐいウォーキング」を開催している。商店街を中心に沿線 5 キロを歩きながら、店の味を楽しめるということで大変好評なイベントである。1 年目は 200 人程度だった参加者が、2 年目は 520 人、3 年目の 2009 年は 975 人と毎年倍々に増加中である。昨年のイベントでは「商店街に野菜畑を作りたい」ということで、群馬県桐生市から「ミニファ」という野菜の苗を植えたエコ土壌マットを取り寄せた。これは群馬大学で開発されたもので、群馬県産の杉の木の樹皮を砕いて肥料を混ぜて作られており、「燃やせる土」ということでメディアでも取り上げられた。このコラボレーションをきっかけに、世田谷駅前商店街では桐生市と連携して毎月「青空市」を開催することとなり、産直野菜等の販売を行なっている。他団体との連携が地元のにぎわいを呼びこんでいる。

ウォーキングでは、世田谷線の「せたまるカード」を使い、スタンプラリーを行って

る。「せたまる IC カード」は PASMO と違って世田谷線専用のカードであり、地域カードとして定着できないか、商店街の方々と検討している。インフラ整備に資金が必要であり、なかなかスムーズには進まないのが現状ではあるが、今後もさまざまな取り組みを提案していきたい。



世田谷線つまみぐいウォーキングは毎年好評！

3.4 エコ&スローラインせたがや検討会事業

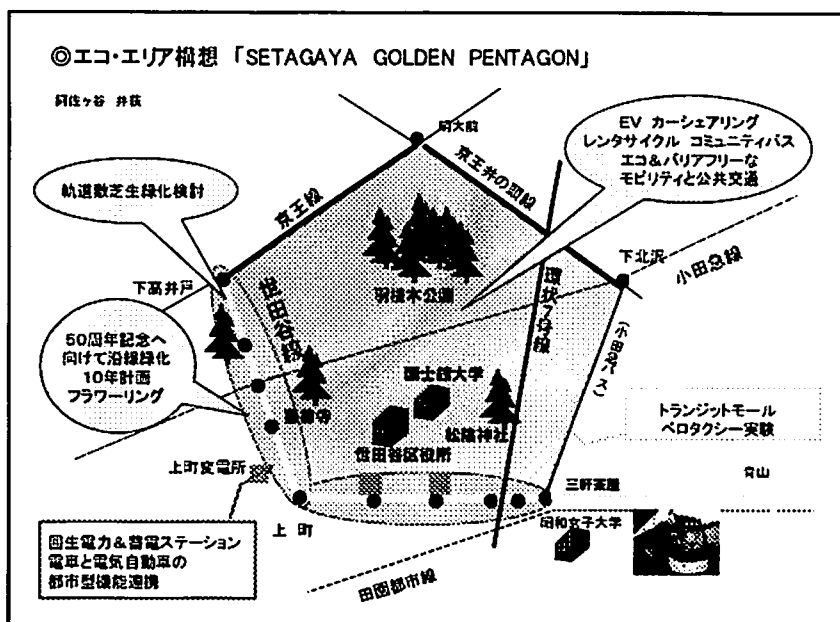
「エコ&スローラインせたがや検討会」は、東急電鉄を中心に、町会、商店街、企業、大学、世田谷区、世田谷線とせたがやを良くする会などが、エコでスローな暮らし方を世田谷線とその周辺地域で広げていこうと立ち上げた団体である。2008年に引き続き、2009年3月にも「世田谷のまちづくりシンポジウム」を開催した。「新エネルギーがひらくモビリティの未来」をテーマに、東京ガスの燃料電池車の展示や、世田谷区で進めている乗り捨て型レンタサイクル「がやりん」のシステムの紹介などを行なった。また、シンポジウムで基調講演をいただいた自動車評論家の舘内正先生は、中学生と電気自動車を作った経緯を展示し、電気自動車を活用したモビリティの未来の話を展開された。

そのときに検討会として提案したのが、「環状 8 号線などに代わる、新エネルギーによるエコな環状型モビリティの形成」というコンセプトである。移動手段は循環型のほうが便利であるが、東京では循環型のエコな公共都市交通は山手線しかない。その周りは環状 6 号、7 号、8 号と車のための環状線なので、ここに電気自動車が走れば将来的にはエコになる。その環状線を唯一、縦につないでいる公共交通が世田谷線である。また、世田谷区の乗り捨て型レンタサイクル「がやりん」がそれを追いかけるように桜上水～経堂～桜新町と設置された。このように縦をつなぐエコなモビリティを充実させることで、世田谷区内のモビリティが便利で環境に優しいまちをつくっていくという未来図である。

この考え方の一つの例として、世田谷線を中心として考えると、世田谷線が三軒茶屋から下高井戸へ、下高井戸から京王線で明大前まで、明大前からは井の頭線で下北沢へ、下北沢から三軒茶屋へは小田急バスがある。この公共交通で囲まれている五角形をまちづく

りのモデルとして「世田谷ゴールデンペンタゴン」と呼ぼうという提案を行なった。

また、検討会では、世田谷線での「軌道敷芝生緑化」についても実現させたいという声があがっている。世田谷区では「世田谷みどり33」という取り組みを実施しており、現在「みどり率」（緑が地表を覆う部分に公



園区域・水面を加えた面積が地域全体に占める割合）が約 25%であるのを、区政 100 周年の平成 44 年までに 33%を目指している。世田谷線の軌道敷に芝生を敷き詰めるとかなり貢献するのではと東急電鉄に提案している。

3.5 その他の取り組み紹介

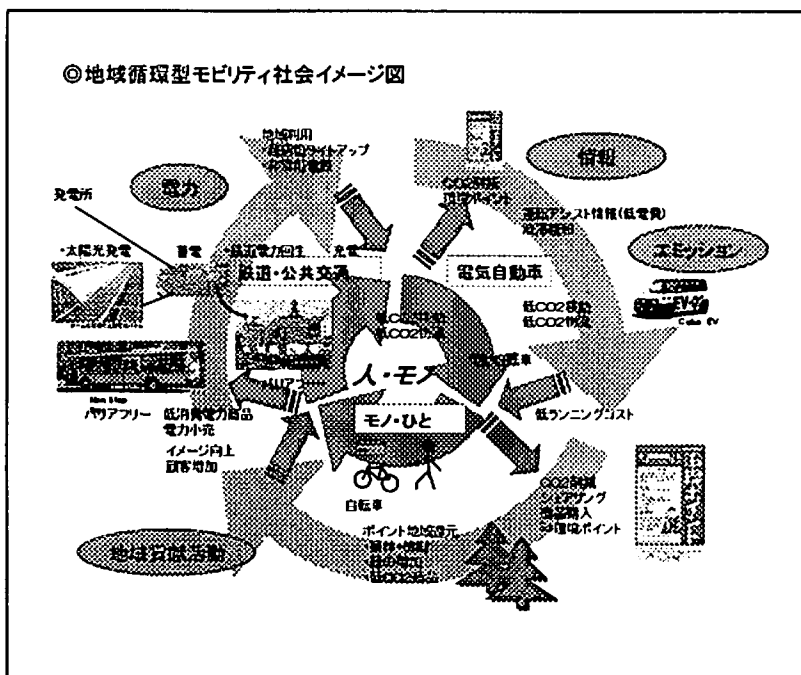
その他、今年在世田谷線独立 40 周年イベントを行なった。10 年後の 50 周年に向けて沿線を緑化していこうと、10 年計画のフラワーリングを開始したところである。



「ガーデントラム山下」での世田谷線フラワーリングイベント

まず沿線の4箇所で花を植えて、沿線の住民が自分たちで花壇を管理し、その面積を広げていこうということである。他にも、「回生電力の蓄電ステーションの設置」、「歩行者天国にペロタクシーを走らせる」、「世田谷線の渋谷延伸」など、無理難題も相当含みながら、東急電鉄や地元の方々と「夢」を語っている。

この考え方の基本になるのが、「地域循環型モビリティ社会」のイメージ図である。公共交通や電気自動車などの環境への負



荷が比較的小さい手段を使ったり、エコポイントなどの仕組みと組合せたりしながら、世田谷区内でヒトとモノを循環させていくということが、非常に重要ではないかと考える。例えば、世田谷線の沿線ポイントを使うときに、沿線の苗木のために1ポイントずつ貯めていくというシステムも検討中だ。

さらに、世田谷線沿線の拠点を活用したまちづくりを進めようと思っている。山下駅舎の空き店舗が3年近くもの間そのままになっている。山下商店街の入口であるのに暗いイメージが漂っており、商店街・町会・東急電鉄とともに「空き店舗の地域での有効活用」を考えている。先日、「世田谷まちづくりファンド」の「まちを元気にする拠点づくり部門」で本審査を無事通過した。これから準備して来年度早々に店舗の改修作業を開始する。

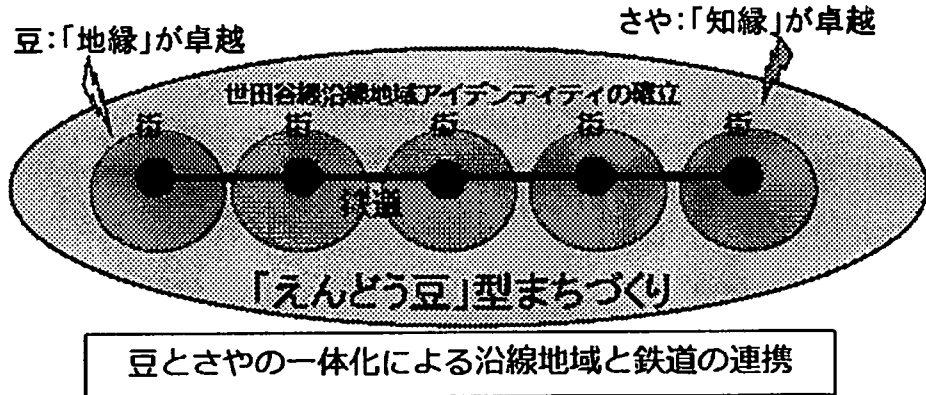
「世田谷線沿線まちのコンシェルジュ」という位置付けで、今まで行なってきたようなイベントを中心に、山下駅舎を「まちなか観光の情報発信・地域交流の拠点」というコンセプトのもと、活用していきたいと考えている。

4. 最後に～「えんどう豆型まちづくり」

最後に「えんどう豆型まちづくり」というコンセプトを説明したい。これは世田谷線の各駅を「豆」、その周辺地域を「さや」と考え、これを貫く世田谷線を地域のアイデンティティとすることで周辺を活性化していくという考え方である。

えんどう豆型まちづくりの意義

- ・豆＝駅周辺ごとの街の地域連携で、新たなコミュニティの形成
- ・企業の社会貢献(CSR)と地域活動のマッチングによる価値向上
- ・様々な活動プロセスとコミュニケーションの円滑化・一体感
- ・公共交通を中心としたエコロジーな都市構造の形成と利用促進



今まで述べてきたようなイベントを開催したり、東急電鉄の CSR（企業の社会貢献）とマッチングしながら地域活性化につなげていきたい。こうした地域活動を続けてきたことで、世田谷線の輸送人員数も伸びてきているという状況であり、地域に密着した取り組みをあらゆる手段で粘り強く重ねていくことが、活性化につながっていくのではないかと考える。

世田谷線輸送人員の推移

資料提供:東京急行電鉄株式会社

